



赤岳山頂にて

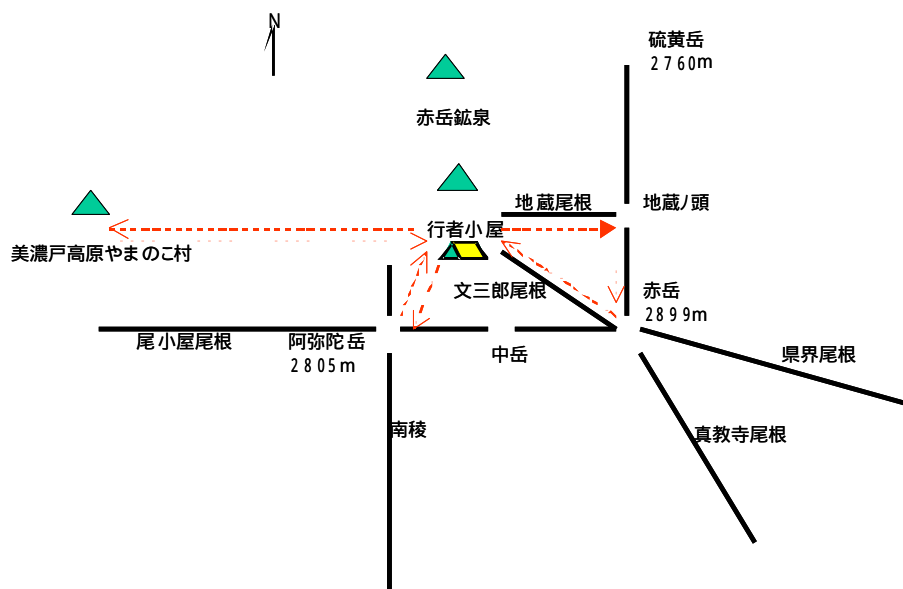
メンバ

金子 清(CL) 亀山 誠(SL) 藤田 健治(気象) 渡辺 勝利(医務)
竹内 幹雄(食糧・会計) 塚本 英吾(渉外) 町田 修(記録・装備)

目的と山域

雪上技術の維持向上と親睦
ハヶ岳南部 赤岳・阿弥陀岳

概念図



12月29日(金) ~ 30日(土)快晴

29日(金)

N1 駐車場(19:50) 恵那 SA(21:00 着) 美濃戸山荘(23:30 着)

美濃戸口近くからうっすらと雪が出てきた。11月の偵察山行情報から美濃戸山荘まで車で入る。林道の雪は圧雪状態で起伏も多少有る。途中、BOXY が足を取られるが PRADO がロープで引張り事なきを得る。山荘の東側駐車場にテント設営する。空は満天の星、明日の天気が約束されたようなものだ。しばらく歓談の後寝る。

30日(土)

行動;山荘 (8:00 発) 1P(8:50 着) 2P(9:50 着) 行者小屋(11:15 着)

テント設営後発(12:15 発) 中岳コル(13:10 着) 阿弥陀岳(14:30 着)

阿弥陀岳(14:50 発) 行者小屋(16:05 着)

夕食(17:00) 就寝(20:30)

コメント 株式会社デンソー1}

ストブのある小屋のガア-で出発の準備をする。天気は快晴でルート正面に阿弥陀岳の端整な稜線がくっきり見える。登山道の雪は、良く踏まれており歩きやすい。しかし積雪で頭上あたりに垂れ下がった木の枝に、渡辺さんの高積上げたサックや塚本さんのピッケルが当たり、歩きにくそうだ。小屋も近くなると樹林が開け、赤岳西面の雪を纏った岩稜がみごとである。2P程で行者小屋と思っていたが案外時間がかかった。行者小屋到着後、即テント設営。塚本さんをテントキ-バ-に残して阿弥陀岳に向かう。ビ-コンとゾンテ棒・スコップは標準装備と定着してきた。ルートは文三郎尾根下部から中岳コルを目指して沢通しに進む。積雪の状態と時間から雪崩の心配は少ないと見ての判断だ。



行者小屋へ

右手、阿弥陀北稜にはいくつかのハ-ティが取り付けられている。雲の流れからして稜線は相当風が強いと思っていたが差程でもない。コルから南の方向に富士山がきれいに見える。阿弥陀へのルートは傾斜がきつく、足場を確認しながら登る。山頂からはかつて登った南稜や真教寺尾根からの赤岳・権現岳が目前に望まれる。下りの滑落を心配してハ-ネスを付け、サ-イルで確保しながら慎重にコルに下る。コルから一気にテント場目指して駆け下りる。すでに日陰となったBCで塚本さんが待っていた。小屋横で水を汲み(冬場でも水が出ている)本日の行動完了。(町田記)



阿弥陀より赤岳

前日、なんとか車で美濃戸山荘まで入ることができた。(途中あきらめかけたが...) まずは一安心。本日は快晴。空の青さと雪景色が実に美しい。お薦めビューポイントは行者小屋手前からの大同心・小同心。中岳コルからの赤岳・富士山遠望。(最高!)20代前半に毎年1月にハヶ岳へ通ってました。久しぶりの「冬のハヶ岳」満喫することができました。メンバーに感謝! (金子記)

12月31日(日) 晴れ時々曇り

起床(5:00) 朝食(5:30)

行動:行者小屋 (7:05 発) 1P 休憩(7:40 着) 赤岳天望荘(8:35 着) 赤岳頂上(9:35 着)

行者小屋(11:00 着) テント撤収後出発(12:00 発) 1P 休憩(12:45 着) 美濃戸山荘(14:00 着)

早朝 5 時に起床。冷えたテントの中でコンロに火をつけ朝食の準備をする。やがて湯も沸いてきてラーメンを作って食べる。体も温まり落ち着いたところで出発準備をする。天気は晴れ。明るくなってからの出発である。行程は地蔵尾根を進んで赤岳に向かうコースである。トレースがしっかりした樹林の中を進んでいく。緩やかな登りからやや傾斜が増していく。35 分ほど歩いたところで一本取り、息を整える。ここから先に進んでいくとやがて樹林帯から岩稜帯となり、長い鉄梯子が雪に覆われている中を慎重に登っていく。やがて地蔵仏の分岐に出る。前方には天望荘も見えている。稜線上は風もあり帽子をしっかりかぶり耳を覆って歩く。天望荘に到着して風の当たらないところで体を休める。南に富士山がくっきりと見えて眺めがいい。ここからすぐ目の前には赤岳頂上小屋が見えている。急な斜面をゆっくりと登り始める。降りてくる登山者も何人かいて挨拶を交わしながら登っていく。出発から 2 時間 30 分で赤岳頂上に到着した。頂上付近は人でいっぱいである。しばらく展望を楽しみ記念の写真を撮る。下山は文三郎尾根から行者小屋に降りていく。頂上直下は雪に覆われた岩稜で傾斜もきつく慎重に下っていく。やがて傾斜もゆるくなり見通しの良い尾根を下っていくと右手にクライマーが岩稜を苦戦しながら登っているのが見える。行者小屋も見え始め、ここからは快調なペースで下り小屋に到着。予定ではもう一泊してゆっくりする予定であったが早い時間にテント場に到着したこともあり、予定を早め下山することになった。テントを撤収して出発、車を置いてある美濃戸山荘には 14 時に到着。その後、汗を流す為に予定していた温泉に立ち寄ったが、休みの為、諏訪湖 SA の風呂に入り、ゆっくりした後、帰路に着きました。(竹内 記)



地蔵尾根の登り



赤岳より阿弥陀岳

夜は、阿弥陀岳登頂の程よい疲れと、テント内 7 人ピシリで暖かく、熟睡できた。お陰で疲労回復と本日の赤岳アタックの戦闘意欲が湧いたのが良かった。入山日が遅めだったためか、歩くルートはしっかりトレースされており、更に微風快晴と、好条件に恵まれての行動となり、赤岳・阿弥陀岳の雄姿、富士山の素敵な眺望、どれも素晴らしく、冬の八ヶ岳をしっかりと堪能する事が出来た。しかし計画当初、若手の参加を想定しての企画であったはずが、若手の参加者が皆無だったのが、大変残念であった。普段のコミュニケーション不足だったかなーと反省もするが、今後、若手の積極的な参画と活躍を切望したい！参加

者及び、ご支援いただきました方々に御礼申し上げます。ありがとうございました。(亀山記)

冬山合宿に参加して (冬山との邂逅)

30年ぶりの冬山合宿への参加を決意したのは去年の11月頃のこと、折しも今年末に計画されている山岳部創立50周年を記念した海外登山の機運が盛り上がりを見せ始めていた頃だった。これに参加し、頂上を極めるには年間を通した体力作りが必要と思われる、冬山の厳しさ、寒さを思い出しておくのも、そのためのトレーニングのスタートにふさわしいと考えたからであった。

冬のハヶ岳へは昭和47年1月に藤田Bと阿弥陀岳北西稜を登って以来だから、ずいぶんご無沙汰しているにもかかわらず優しい山の神はいやな顔もせず、二日間の紺碧の空でもてなしてくれた上に、顔面への軽い凍傷と今に残る指先の痺れというお土産まで付けて大歓迎してくれた。

とは言うものの「いざ冬山」となるとなかなか大変で、準備段階からの一部始終の顛末をこれから何十年ぶりかで冬山を再開しようとする岳兄諸氏の参考になればと思い、恥も外聞もなく記すことにする。まず、古い装備の更新から始めなければならないが、この先何回使用するかわからない脱着簡単な12本爪アイゼン、ゴアテックスのオーバーヤッケ、冬用ズボン(今時ニッカズボンを穿いている人はまれです)、ハーネス等々を新規購入するに当たっては我が家の「山の神」に投資対効果を説明し、厳しい審査を受けなければならない。審査に通った後は、どんな物を購入すればよいかのアドバイザーとして藤田Bに同伴してもらい、そして購入したそれらの装備を使いこなすために、事前に雪上での装着テストを行わなければならないが、これにも先輩の特権を有効に生かして前述の藤田Bに、無理やり付き合ってもらうことに決めた。そこで、昔は冬山合宿前の雪上訓練地になっていた伊吹山に冬山再開のご挨拶を兼ねて出かけてみたが、この冬はあいにくの雪不足、やむなく頂上付近の残雪上で新調のアイゼンを装着した歩行訓練のみでお茶を濁す羽目となったが、さすがに最新装備は軽くてすこぶる具合がよい。そういえば、昔は防寒のために白金懐炉を持って行ったっけ、目出帽は、手袋は、オーバーミトン、タイツも穿いていったよな、共同で魔法瓶に熱い紅茶も持っていったが、今はどうしているのかな等々、出発前の我が家の座敷は辺り一面に装備や行動食が散らばり、山の神の指導の下、てんやわんやの大騒ぎで暮れていった。

食料についてであるが、行動食は「個人調達方式」となり、これも今風かなと思う反面一抹の寂しさを感じたものである。昔は出発前に、行動食用のクッキーを会社の調理室で参加者や留守部員の大勢が集まり「わいわいがやがや」と賑やかに焼いて、それに焼き豚やチーズやみかんなどを加えて全員の一日分の行動食を作り、全員が同じ行動食を分け合って食べたものだったが、大げさに言えばそこに皆で冬山を体感していると言う共有意識のようなものがあつたと思う。今は時代が変わり、個人の嗜好にあつたものという一見合理的と思える方式になっており、この方式を否定するわけではないが、新人が入つた場合などは入山前に何を持っていくのかをしっかりと事前チェックする必要があると思う。山の中でこんなものを持ってきてどうするつもりかと怒つてもあとの祭りだからである。又、昔の共同食は朝も夜も早く作ることが原則でアルファ米に「ベミカン」をぶち込んだ雑炊風が定番であったが、今は無洗米を炊いて頂ける上に食後のデザートまでつくという夢のような献立、火器も、昔のように固形燃料で予熱してやっと点火できる白ガソリンのフォエブスは遠くなり、今はEPIガスコンロで一発点火、冬山のテント生活もずいぶん豪華に且つ、楽になったものと感心したが、寒さだけは変わりなく昔を思い出させてくれた。

さて、肝心の行動であるが日頃のトレーニング程度では現役にはかなわないことを実感した。週2回のサーキットトレーニングと毎日欠かさない18F屋上までの数回の階段登り位ではとても彼らとは余裕を持って行動を共にできそうにない。実は内心、入山日の中岳沢の登り位は軽くこなせると思っていたのだが、気持ちに体が付いてこない、足が上がらない。阿弥陀岳にやっとの思いで登頂し、下山途中で顔面の凍傷によやく気付いたのも、ネックウォーマを付けなかった余裕の無さからだったかなと反省している。ここまで冬山の今昔を徒然なるままに書いてみたが、いずれにしても現役の仲間たちの心強いサポートを得て、30年ぶりの冬山を「浦島太郎」の気分で無事に終えることができ今は満ち足りた気分一杯である。そして、これで今年末の遙かなる「キリマンジャロ」への第一歩を踏み出すことができたと思うので、後はひたすら「体>技>心」の鍛錬に精進するだけである。(渡辺勝利)

「冬山合宿に参加して想い新た」

今期も冬山合宿に参加することができて、一年の登り収めをすることができたが、一方で、OBの塚本・渡辺両先輩にも同行頂き、共に赤岳ピークを踏むことで7人の山行が充実したものと成った。

話が少し横道にずれるが、一昨年デンソー山岳部OB会を正式にスタートして頂き二年目を迎えているが、合宿や例会にOBの皆さんに積極的に参加して頂き現役部員と山登りを楽しみ部活動の一翼を担って頂いている。

また、相変わらず国内登山人口の中心は中高年層であると思いがちであるが、気をつけて山の中を歩いていると若い女性登山者が増えてきているのはおもしろい現象ではなかろうか。

見方を変えると、ここにきて登山人口が徐々にではあるが若年齢層化が始まってきているようにも感じている。私が云いたいのは、山岳部の活性化を望むとき狙い目を間違えないようにしたいということである。

ことわざに「将、射んと欲するなら先ず馬を射よ」とか……

我が部では07年冬季休暇を利用した海外登山計画があるが、参加予定19名中1/3の人がOB部員であるのも登山界の実情が背景にあるようだ。

平均寿命はますます延びていくことは間違いの無いところでもある、健康で山登りのできる仲間を増やすために一点集中ではなく、全方位的な勧誘活動を進め、方向性を見直し時期を迎えていると声高に云いたい。

(記、藤田健治)

【気象総括】

入山前の12/28の冬型気圧配置で日本海側に大雪を降らせたあとの入山二日間は高気圧が本州をスッパリ被い行動を楽にさせてくれた。年明け後の1/2からは西高東低の冬型気圧配置で荒天降雪となり、我々は恵まれた冬山登山を堪能することができた。



中岳コルから富士山遠望

リーダ所見

計画、行動

<計画>

- ・年度計画で新人・中堅部員のレベルアップを狙いに八ヶ岳(赤岳・阿弥陀岳)を計画した。残念ながら対象部員の都合がつかず、参加者はベテラン部員とOB部員の合宿となった。合宿までの事前準備としては11月に今回のコースを偵察し、ルートや危険箇所の確認を行った。12月は寒さに慣れるために御岳にて雪上訓練の実施。また、個人的には日々体力強化に努め本番を迎えることができた。
- 新人・中堅部員においても、事前準備(偵察、雪上訓練)に積極的に参加し、次年度につながる活動ができたと思う。
- OB部員においては、久しぶりの冬山合宿参加で装備を更新され、山への復活が期待される。今回の合宿に、新人～OB部員まで多くの部員がかかわることができ今後の活動が楽しみである。

<行動>

- ・暖冬で雪が少ないのではないかと心配していたが、合宿前の寒波で降雪もあり冬山を満喫することができた。今回のメンバー構成は平均年齢57歳と世間が心配する年齢となったが、気持ちは万年青年(?)。全員元気で快調に歩いた。阿弥陀岳の下りは一部ザイルで確保し安全登山を実行した。二日目の赤岳アタックも午前中で終了し、1日早い下山となった。二日間とも好天に恵まれ360度の大パノラマを楽しみながら登ることができた。
- また、OB部員と久しぶりに一緒に合宿ができ、会話を楽しむことができた。
- 今回、あらためてOB部員の山への情熱、行動力には脱帽でした。

(金子記)



行者小屋から赤岳夕焼け

以上